

---

# 透明人間の恋人

紺野智夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

透明人間の恋人

### 【Nコード】

N7598I

### 【作者名】

紺野智夏

### 【あらすじ】

一見普通のカップルのような恵美とアキトだが・・・切ない恋の話。

コーヒーカップに手を伸ばした。

「僕は飲めないんだから、2人分用意しなくてもいいのに」  
「・・・女心が分からないのね」

彼のコーヒーをすすする。苦みが口の中に広がる。

彼は今日もコーヒーに手を付けることはない。

それは紅茶でも、オレンジジュースでも、一緒。

彼は飲み物を飲まない。

さらに言えば、食べ物だって食べない。

「そうやって、僕の分まで飲んでたら、身体に悪いんじゃないの？」

「コーヒー2杯で身体壊してたら、やってけないわよ」

「でも、夜眠れてないんでしょ？」

「・・・分かったっちゃった？」

「くま、出来てるよ」

こうやって見ると、私たちは普通の、どこにでもいるカップルだ。  
たわいない会話。日曜日の午後。家のテレビで借りてきたDVDを  
見て、一息。

「コーヒーか。だんだん、味も忘れてきちゃったなあ」

「でも、食べなくて良いつて便利じゃない？」

「君は、透明人間心が分かってないよ」

「なにそれ」

「だんだん、味を忘れていくんだ。寂しいもんだよ。」

彼・・・アキトは、そういつて寂しそうに笑った。  
私は居たたまれなくなって、そっと目を逸らして言う。

「次は、いつ来るの？」

「消えてなければ、また来週かな」

「消えるなんて、言わないでよ。縁起でもない」

「もう既に半分消えてるんだ、いつ居なくなっても、何が起きても、僕はもう驚けないよ」

「・・・でも、貴方は消えない。私を残して居なくなれる程、度胸も自信もないはずよ。臆病者なんだから、昔から」

「そうだね、僕が見ていないと、恵美ちゃんはあっちこっちへふらふらするから」

アキトが楽しそうに笑った。本当によく表情が変わるオトコだ。比較的愛想の悪い私とは違って、アキトは情緒豊かで、感受性も高い。いつも、泣いたり笑ったり忙しい。

”オトコらしい”とは無縁だけれど、私はそんなアキトを可愛いと想う。

それは私が、アキトより2つ年上だからだろうか。それとも、アキトの産まれ持った何かが、そう想わせるんだろうか。

何はともあれ、アキトはよく笑って、よく泣いた。そして、よく怒って、また笑った。

出会った時は、誰からも好かれる少年だった。

付き合い始めた頃も、少し子供っぽいところはあるけど、明るくて、優しい青年だった。

今は、普通の、透明人間。

アキトが透明（正確には半透明）になったのは、半年前のことだ。理由は解らない。突然、そうなってしまった。

アキトのことが見えるのは、どうやら私だけらしい。私が相当に驚いて、気を落ち着かせるまでに長い時間を要したのに対し、当事者であるアキトはアツケラカンとしていた。

「これはこれで楽しいし、恵美ちゃんに見えるなら、別にいいや」

そんなことを言って、笑っていた。

寂しくないわけ、ないのに、それでも笑っていた。

私はそれをみて、少し安心した。アキトの明るさは、私にとっての救いで、アキトが居ない生活なんて、考えられなかったから。

とりあえず、私たちはポジティブに生きることにした。

今まで通り、なんら変わらない生活。

彼が普段、透明な姿で何をしているのかは知らないけれど、なんだか楽しく気尽にやっているようだし、私はアキトと過ごす休日を楽しみに、会社で働いていた。

「恵美ちゃん、ねえ、聞してる？」

いつのまにか、アキトが私の横に座って、顔をのぞき込んでいた。

「あ、ごめん、ちょっと考え事」

「悩み？」

「ううん、違う、アキト元に戻らないのかなって」

「・・・やっぱり、透明人間じゃイヤ？」

「別にそういう分けじゃないけど。どんなアキトでも、アキトはアキトだからね」

「でも、人間って便利だね。この姿じゃ、恵美ちゃんに触れることも出来ないんだ。ごめんね、恵美ちゃん」

顔を歪めて、私を見るアキト。また、泣きそう。

泣かなくて良いんだよ。

私は、こうやって一緒に入れるだけで、こんなにも笑顔で居られるのだから。

「アキト、我が侘言っていい？」

「えっ！うん、いいよ！恵美ちゃんが僕にお願いなんて、珍しい」

「・・・居なくなったら、やだよ」

多分私は、今、へたくそな笑顔で笑っているのだろう。

アキト、貴方と居る今は幸せだけど、貴方が居なくなること考えると、私はこんなにも・・・脆いの。

「・・・言ってみただけ。気にしないで、アキトは私を置いていかないって、分かってるから」

でも、慌てて言葉を濁した。大丈夫、私は脆いけど、弱虫じゃないから。私の弱さをアキトがちゃんと分かってくれるから、私は強くいられるの。

触れることが、抱きしめることが、キスすることすら、出来なくても。

それでも良い。それでも、愛してる。

「恵美ちゃん、無理はしないで、イヤになったらいつでも・・・ちゃんと、話して欲しい」

「分かってる。それが、アキトのタメでもあるの、分かってるよ。」

だけど、今は良いの。これからどうなるか、なんて分からないし、今はアキトが此処にいること、それが現実なんだから。下らないことと言わないの。・・・私もだけどね。」

「うん、僕は恵美ちゃん、好きだから」

「恥ずかしげもなく言わないの！もう・・・あんたは、ほんと・・・」

アキトが真っ直ぐこっちを見ていた。

その先の言葉を、待っているとばかりに。

「ほんと・・・」

「・・・ほんと？」

・・・やめた。この続きは、言ってあげない。

言ってあげない、けど、でも

「ん」

そっと、空気にキスをした。

何もないはずなのに、どうしてか、熱が唇から伝わってくるようで、不思議。

何もない空気でも、そこにアキトがいることを、私だけは知っているから。

だからこんなに、ドキドキするの？

温もりは、触れ合わなくても貰えるもの。

貴方に出会って、貴方が透明人間になって、それでも時間を追うごとに、私は貴方を好きになる。

「恵美ちゃん、愛してる」

透明人間は、そういつて、目を瞑る。

私はもう一度、空に口づけをした。

アキトが笑った。幸せそうに。

今度は私も、上手く笑えたと思う。

そんなお互いの表情をみて、ますます笑顔になって、声に出して笑った。

透明人間の恋人は、幸せです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7598i/>

---

透明人間の恋人

2011年1月27日11時49分発行